

RACE	2024 AUTOBACS SUPER GT Round8 MOTEGI GT 300km RACE
DATE	予選：2024年11月2日 決勝：2024年11月3日
CIRCUIT	モビリティリゾートもてぎ（栃木県）
WEATHER	予選：雨/ウェット 決勝：晴/ドライ
RESULT	公式練習：2位 予選：9位 決勝：6位

シーズン残り2戦に迫った今年のSUPER GTシリーズ。「2024 AUTOBACS SUPER GT Round8 MOTEGI GT 300km RACE」は、予選日がまたしても雨に左右されるという不安定な状況に。そのなかでNo.100 STANLEY CIVIC TYPE R-GTは予選9位からスタートを切り、粘りある戦いを見せて6位入賞を果たした。



◎予選日：

雨の予報が出ていたもてぎ周辺。朝一番のサポートレースから完全なウェットコンディションとなり、SUPER GTの公式練習が始まる午前9時の時点でもその状況が変わることはなかった。スタート早々からコースアウトした車両によって、セッションは赤旗中断となり、その後も似たような状況が続くなど終始落ち着かない展開に。よってウェットタイヤの性能チェックやセットアップなど、“やるべきこと”が思うように進まず、時間だけが過ぎていった。

開始からおよそ1時間、増えた雨量のなかで1台の車両が停止し、4度の赤旗が提示される。一方、No.100 STANLEY CIVIC TYPE R-GTはひと足先にセッション開始からドライブを担当していた山本尚貴選手がまず1分56秒488のチームベストを刻んで9番手につけており、この赤旗を前にしてピットでのセットアップ行なっていた。再開後には、新たに牧野任祐選手がコースイン。アウトラップを経て計測2周目のアタックラップで1分50秒292を刻み、トップへ。だが、その直後には5回目の赤旗が提示されてセッション中断に。結果、これをもって混走セッションが終了する。

その後、GT300クラスの専有走行が始まるも、強まる雨脚に走行は難しく、スピニアウトする車両が出て赤旗に。結局GT300クラスだけでなく、予定されていたGT500クラスの専有走行もキャンセルに。なお、混走セッション最後に64号車CIVICが最速タイムを更新したため、No.100 STANLEY CIVIC TYPE R-GTはセッションを2番手で終えることとなった。

降り続ける雨に、公式練習後に予定されていたFCY（フルコースイエロー）テストもキャンセルとなり、午後からの予選セッションへの影響も心配されたが、ほどなくして雨は小康状態へ。お昼時間のピットウォークは無事に実施され、ドライバーふたりは束の間ではあったが、ファンとの交流を楽しんだ。



予選は午後2時にスタート。まだ雨は依然として降り続けている。なお、今回のセッションはウエット宣言下で行なわれるため、装着するタイヤ本数には制限は設けられない。Q1とQ2における各ドライバーのベストタイムを合算して、決勝のスターティンググリッドを確定する方式で進められた。

気温17度、路面温度19度ということもあり、GT300クラスから始まった予選は、雨で冷えた路面に苦戦する車両も見受けられる状態。このあと午後2時53分にはGT500クラスのQ1がスタート、牧野選手がNo.100 STANLEY CIVIC TYPE R-GTに乗り込みコースへと向かった。ライバルよりも早めのタイミングでアタックを始めると、最初のアタックラップで1分50秒898をマークしてトップに立つ。さらにもう1周アタックへと挑んで1分50秒445へとタイムアップ。ライバルたちも自己ベストを刻む走りを見せたことで、最終的には6番手でQ1を終えた。

Q1終了からおよそ45分後の午後3時49分、Q2がスタート。今度は山本選手がステアリングを握ることになる。第6戦SUGO、第7戦オートポリスでは各チームベストタイムの結果をもってスターティンググリッドが確定する形であったため、合算タイムでのセッションは第4戦以来（第5戦は延期）となる。Q1での牧野選手からのインフォメーションをもとにQ2へと臨むなか、残り3分強で1分49秒932のトップタイムをマークして流れを作ると、ラストアタックで自己ベストを更新する1分49秒897をマーク。結果、Q1、Q2合算タイムによってNo.100 STANLEY CIVIC TYPE R-GTは9番手から、翌日の300km決勝レースに挑むこととなった。

シリーズチャンピオン争いが佳境を迎えるなか、予選結果を受けて山本選手は「苦しいレースになりそうですが、がんばって追いつきたいと思います」、また牧野選手も「明日はドライコンディションになると思うので、お客様も快適にレースを見ていただけたらと思います。なんとか追いつかれるようにがんばるので、応援よろしくお願いします」とふたり揃って闘志を内に秘めるようにコメントした。

今大会では、No.100 STANLEY CIVIC TYPE R-GTのほか、ランキング争い中の2台がサクセスウェイトと燃料流量リストラクター径を1段階調整したものを使用して戦う。特にランキングトップ車両とのポイント差をこれ以上広げず、最終戦へと持ち込みたいチームとしては、攻めの走りでご成績を狙っていきたいところだ。ドライコンディションへと変われば、状況によって総体的にパワーバランスにも影響が出ることは間違いない。そのなかでまずはミスなく与えられた仕事を完璧にこなし、結果を求めていきたい。



◎決勝日：

前日、降り続けた雨は夜には上がり、決勝を迎える日曜日は朝から雲ひとつない青空がサーキットを包みこんだ。まぶしい日差しにも恵まれ、訪れたファンには絶好のレース観戦日和となったことだろう。

決勝は、レースウィーク初のドライコンディションで行なわれるため、まず午前11時30分からのウォームアップ走行では、20分という短い時間のなかで各チームとも慌ただしく準備に勤しんだ。ニュータイヤの皮むきやフィーリングチェックはじめ、さまざまなメニューを次々とこなし、あっという間にセッションが終了。スタート進行へと切り替わる。

冷たい風が吹いて入るが、強い日差しもあって、気温は22度、路面温度は31度まで上昇。ようやく秋らしいコンディションとなるなかでついに決戦の火蓋が切って落とされた。

No.100 STANLEY CIVIC TYPE R-GTの第1ステイントを務めるのは、牧野選手。ポジションキープのままオープニングラップを終えて周回を重ねるなか、早速6周目にGT300車両のスロー走行を受け、FCY（フルコースイエロー）が導入。およそ3分後にリスタートするも、間髪容れず2度目のFCYとなり、落ち着きのない序盤となる。また、そのなかで上位の1台にトラブルが発生し、ピットイン。労せずポジションがひとつ上がって8位となった。



15周を過ぎ、タイヤにもしっかりと熱が入ると、前後車両との間隔が詰まって攻防戦に。ただ、ストップ&ゴーのレイアウトをもつもてぎゆえ、逆転劇に持ち込むのは容易ではない。しかもレースウィーク初のスリックタイヤでの戦いということも影響してか、今回はどのチームも似通った戦略をとったと思われる、22周終わりを境にして一気にレーティンのピットインが始まる。No.100 STANLEY CIVIC TYPE R-GTは23周終わりにピットへと戻り、牧野選手から山本選手へと交代、給油とタイヤ交換を行ないコースへと復帰する。また、24周終了時にはコース上のGT500全車が作業を完了し、残り3分の2での第2ステイントの幕が上がった。



6番手の位置から追い上げを開始した山本選手。目前には39号車Supra、後方には14号車Supraと、他メーカーに挟まれる形で周回を重ねる。さらには他車も含めて全7台がひとつの線のようになったの攻防戦を展開していたが、その流れに動きを与えたのが、44周目に導入されたFCYだった。GT300クラス車両がトラブルにより1コーナーを直進し、3度目のFCY導入に。だが、そのリスタートに合わせて背後の14号車が90度コーナーで先行。No.100 STANLEY CIVIC TYPE R-GTは7番手に後退した。ところが、のちに14号車がトラブルかスロー走行でピットへ。山本選手は再び6位で走行を続けたが、終盤を迎える頃には前後車両との差が広がり単独走行に。結果、膠着状態ままチェッカーを迎えている。

6位で戦いを終えたNo.100 STANLEY CIVIC TYPE R-GT。加点ポイントにより、56点で最終戦を迎える。一方、ランキング争いでは、暫定トップの36号車が予選3位から優勝し、ポイントを74点へと伸ばしている。いよいよノーウェイトでの戦い、しかもお膝元である鈴鹿でCIVIC TYPE R-GTとしての初タイトルを狙う一戦だけに、パーフェクトウィンが必須。極めて高いハードルではあるが、だからこそ臨み甲斐があるというもの。鈴鹿に向けてあらためてチームがひとつとなり、厳しい条件に全身全霊で挑むことになる。シーズン集大成として、粉骨砕身で取り組みたい。



COMMENT FROM TEAM

◎小島一浩監督



レース全般を通じてクルマのペースも良かったのですが、防戦するシーンがどうしても多くなってしまいました。ドライバーも頑張ってくれてくれたと思います。ただ、一番のライバルである36号車が優勝したため、ポイント差が2点から18点まで広がってしまいました。ランキング的にはまだ2位ですが、最終戦の鈴鹿は必勝態勢となり、予選から大量得点を取らないとチャンピオンは難しい状態です。

しかしながら、今シーズンも毎戦きちんと結果を残す戦いを重ねてきているので、最終戦では勝ってシーズンを終わることができれば、と思います。皆さんには最後まで応援していただきたいと思います。

◎山本尚貴選手



決勝グリッドからポジションを3つあげることができましたが、（タイトルを争う）ライバルの36号車が優勝したので、かなりポイントが離れてしまいました。

担当したセカンドスティントでは、タイヤのピックアップが酷くてペースを落としてしまったのですが、最後はまた盛り返していいペースで走ることができました。良かった部分もあるだけに、悔しいレースになってしまいました。

◎牧野任祐選手



最終戦で勝って終われるようにしたいですね。今シーズンは表彰台（第1戦3位、第4戦2位）がありますが、まだ優勝できていないので、シンプルに優勝目指してがんばりたいと思います。引き続き応援よろしくお願いします。